
怪話篇 第三話 鏡

K1.M-Waki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪話篇 第三話 鏡

【Nコード】

N5706T

【作者名】

K1・M・Waki

【あらすじ】

博物館の鏡に現れるという幽霊。ある夜、それを確かめに行った彼が見たモノとは…

怪話篇 第三話 鏡

1

「おはよう、山村。早いな。」

「やあ、おはよう。おまえの方が早いじゃないか。何だ、眠そうな顔して。」

「ああ、昨日徹夜だったんだ。ちよつと、館長に頼まれたもんだから。」

「あのおっさん、無理ばかり言うからな。で、仕事は片付いたのかい？」

「それが、全然なんだ。半分も出来てない。．．．その．．．、夜中に、変な事があつたんでね。」

「変な事？何だ、．．．おまえ顔色悪いぞ。いったい何があつたんだ？」

「．．．ああ。おまえ、．．．信じないだろうなあ。」

「おい、どうしたんだよ。田口、さつさと言つちまえ。」

「ああ、．．．なあ山村．．．おまえ、ココの奥にある、鏡．．．知ってるだろう。」

「ああ、絵画を飾った廊下の奥の方だろう。一番奥の行き止まりのところ。」

「そうだ。あそこの、大鏡だ。」

「戦前の物で、この博物館が開館した当時からあるんだって言うてたよ、うちの館長。」

「うん。．．．そこで、．．．見たんだ。」

「何を？まさか、幽霊だなんて言うなよな、バカらしいから。」

「．．．．．」

「何、黙ってたんだよ。本当に、幽霊が出たのか。」

「．．．．．もういいよ。どうせ信じないんだから。」

「おい、冗談だろ……。」
「俺、館長に言い訳考えなきゃ……。」
「おいおい、待てよ。おい。」

2

「なあ大木。田口の奴、今朝はおかしいんだ。幽霊見たって言うし。」

「ああ……、絵画棟の鏡か。」

「おつ、おまえ、知ってるのか？」

「……うん。俺も見たから……。」

「……本当か。」

「夢かも知れんがな。」

「どんなんだ？」

「十日くらい前だったかな。夜中過ぎまで用事があったね。もう帰ろうかと思っていたら、例の廊下の方で、妙な物音がしたんだ。それで、……行ってみたら、」

「いたのか……。」

「何もいなかった。」

「怒るぞ。」

「いや、……最初、泥棒か何かと思ったんだ。幸いあそこは、絵が架けてあるだけで、あの鏡で行き止まりだ。隠れ場所なんて、……ないだろう。だから誰かいたなら、すぐ分かる……だろっ？」

「そうだな。で、結局何もなかったんだろう。」

「そうだ。でも、あそこはいつも薄暗いだろう。だから、念の為に調べてみたんだ。」

「……。」

「正真正銘、誰もいなかったよ。これは、本当だ。」

「ああ、信じよう。」

「それで……、今度こそ帰ろうと思った時、鏡に……、」

「鏡に？」

「人影が写ったんだ。で、急いで振り向いたんだが、……誰もいなかった……。」

「……。」

「廊下の入口までは、随分ある。絶対に隠れない……。実際、そこには俺一人しかいなかった……。」

「絵を、見間違えたとか……。」

「いや。そんな事は、絶対にない。」

「それじゃあ……、そうか！分かったぞ。なんて事はないじゃないか。」

「……。」

「おまえ、自分の姿を幽霊と思ったんだ。」

「残念だったな、川村。鏡の人影は、二人だったんだ……。」

3

「よう、田口に大木。おはようさん。」

「おはよう、山村。今朝は、いやに早いな。こういう風の吹き回しだ。」

「そうそう、雨でも降るんじゃないのか。」

「言つなあ。昨夜、徹夜したんだよ。」

「館長命令か。」

「そう言う事。で、例の幽霊だが。」

「やっぱり出たのか。」

「さっぱり出なかった。」

「本当か？」

「じゃあ、俺達の見たのは、夢か何かだったのかなあ。」

「そう言う事。俺、夜中過ぎに、こないだおまえ等が言つてたのを思い出してね。」

「言つてみたのか？」

「ああ、丑三つ時だったぜ。けど、誰もいなかったよ。」

「それは、分かってる。問題は、……」

「そう、問題は。」

「何も問題なんてなかったよ。鏡にだって、俺一人しか映らなかったぜ。」

「そつ、そうか。じゃあ、夢か。」

「そうそう。幽霊なんか、いるはずないよな。そうだよ。」

「そうだな。」

「そう言う事だ。」

「何が、そう言う事なんだね？」

「あつ、事務長。」

「北川さん、おはようございます。実はですね、絵画棟の鏡なんです、……」

「ああ、あれね。そうなんだ。昨日の昼過ぎに、アルバイトの子が壊しちゃってね。物が大きいもんだから、業者の方も二・三日待ってくれって。で、危ないから、枠だけにして置いたんだ。館長も力ンカンでねえ、……どうしたんだ、みんな。青い顔して。幽霊でも見たのか？」

e o f .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5706t/>

怪話篇 第三話 鏡

2011年10月9日03時55分発行